

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて2月号)

<p>山下 悦子</p> <p>①被災者は官学業に見捨てられた(戸谷英世) —THIS IS 読売 1995・1・17の悪夢から2年。犠牲となった被災者達の教訓が生かされていない復興事業</p> <p>②対談「世界最悪の官僚支配をこうして崩す」(佐高信、K・V・ウォルフレン) —現代 大蔵省をはじめとする官僚支配の構造批判を使命とする2人。対極の小沢一郎評価に注目</p>	<p>中西 輝政</p> <p>①特別企画 縄文 その魅力をたどる(梅原猛、森浩一、安田喜憲ほか) —THIS IS 読売 日本と日本人を見るわれわれの視線を確実に変えてゆく、浮上する縄文世界への入門特集</p> <p>②「新しい教養」へのヒント(筒井清忠) —アステイオン新年号 今日の教養と21世紀を見る視点として中国古典文化の重要性を教える</p>	<p>橋爪大三郎</p> <p>①語り口の問題——ユダヤ人問題とはわれわれにとって何か(加藤典洋) —中央公論 日本人が歴史の主体に復帰するのにユダヤ人学者アーレントの語り口と苦悩が手本になる</p> <p>②最後の氷山——中国の報道改革(戴晴) —世界 一昨年から強化された世論指導(中国政府のマスコミ統制)を鋭い女性記者が告発する</p>	<p>編集部</p> <p>①死生観を問わぬ「がん論争」への疑問(西部邁) —諸君! 「闘うな」論の提起を評価しながらも、論争に「死生の倫理」の視点が欠けていることを指摘</p> <p>②没後10年・素顔の流澤龍彦 架空の庭のおにちゃん(矢川澄子、山下悦子ほか) —正論 『O嬢の物語』の下訳もした元夫人が語る、異端の文学者の1950~60年代の知られざる素顔</p>
---	---	---	--

雑誌を読む

1月

「日米中」関係

- ◆97年、米中は和解する(田中明彦) —中央公論  
1989年の大激震の余震も、収まる可能性が出てきた
- ◆アジアの中の日米中関係(小島朋之) —アステイオン新年号  
「全方位」「威信」という中国外交の二面性を分析
- ◆特集 米中大接近で日本ははずされたか?(長谷川慶太郎、日下公人、霍見芳浩ほか) —サンサーラ  
政治生命維持へ日本たたき走るクリントン(霍見)
- ◆特集 香港回収(朱建米、莫邦富ほか) —世界  
香港返還で大陸・台湾との三角関係に激変が(朱)
- ◆米国の新アジア戦略(ジョセフ・S・ナイ) —世界週報1/7~14、1/21~28  
関与政策で中国の国際社会への取り込みを努力する
- ◆対談 ソフトパワーの米・中・日(入江昭、船橋洋一) —潮  
「中国の時代」をプラスに活用すればよい(船橋)

中西 必要な「外側」への目

中西輝政さん 米中関係の修復に対して懐疑論が多かった。そうした中で、両国関係の将来像について比較的確切な視点の打ち出しが出ているのは「中央公論」の田中明彦さんの「97年、米中は和解する」です。冷戦後初めて、かなり深い和解が成立するだろうという見通しを踏み込んで論じています。悲観論としては「フォーサイトNO.2」のブルース・ストロクスの「米中接近は容易には進まない」や、「アステイオン」新年号の小島朋之さんの「アジアの中の日米中関係」、「サンサーラ」の特集「米中大接近で日本ははずされたか」などが、中国側の問題が大きすぎるという条件を強調しています。「エコノミスト」21の特集「赤い香港の未来」、「世界」の特集「香港回収」など、香港返還問題を取り上げたものも多かった。

橋爪大三郎さん 「中央公論」の田中さんの論文は、大変明快でした。朱建米さん 「香港の中国化」か「中国の香港化」かで見解が分かれている中で、「世界」の特集は、中国の可能性を前向きにとらえようとしている点、興味深く読みました。「サンサーラ」の長谷川慶太郎さんと日下公人さんの対談「覇権国家「中国」に翻弄されるな」など、香港の今後について悲観的な見方が多かったのですが、むしろ中国のビジネスチャンスには「中国の香港化」にかけて移民先から香港へ舞い込む「回流」現象が進んでいる。田中さんの論文は、中国が香港返還を経てどう変わるかについて歴史的なまなこをもちました。岸屋太一さんの「排除されるニッポン」(現代)など、経済的にだけではなく文化的に



右から橋爪大三郎さん、山下悦子さん、中西輝政さん

橋爪 スタンス取れず迷走

ぶない大國にしてはならない。米中日の関係が21世紀の国際情勢を考へるうえで大きな「三角形」として浮かび上がっている。「三角形」は2国関係に比喩的な安定が難しいので賢明に対応しなければなりません。田中さんはその点を意識して分析してしまっています。朱さんは大きな「三角形」を背景にした香港、台湾、中国大陸という、小さな三角形に注目し、この三つが同じ文明圏に属しながら独自の主体として動いているとしています。ナイさんは3国関係に関する米国のリアルな射程の長い見方を示しています。

山下悦子さん 「香港の中国化」か「中国の香港化」かで見解が分かれている中で、「世界」の特集は、中国の可能性を前向きにとらえようとしている点、興味深く読みました。「サンサーラ」の長谷川慶太郎さんと日下公人さんの対談「覇権国家「中国」に翻弄されるな」など、香港の今後について悲観的な見方が多かったのですが、むしろ中国のビジネスチャンスには「中国の香港化」にかけて移民先から香港へ舞い込む「回流」現象が進んでいる。田中さんの論文は、中国が香港返還を経てどう変わるかについて歴史的なまなこをもちました。岸屋太一さんの「排除されるニッポン」(現代)など、経済的にだけではなく文化的に

山下 市民の問題に直結

中西さん 日本人は日米中関係を考へる時に、「三角形」の内側に目が行ってしまい、視野が狭まる。ところがその外側には東南アジアも朝鮮半島もあり、ロシアも中東もあるわけで、そこに東南アジアは重要です。山下さん 中国に対する不信感をむき出しにするような論調が多く、船橋さんと江さんの対談のように、前向きに日本は日本の改革に専念すべきだとする論調は少なかったです。

橋爪さん 「アステイオン」で小島さんは、日本人の対中イメージがほとんど悪くなっているという世論調査の数字を挙げ、中国のことをよく知らないのにイメージばかり悪化しているのは憂慮がたかっています。

中西さん 日本人には悲観論を喝望してしまわない機運が溜蓄き、悪循環を自分から作り出している。もう少し骨太な世界観を持てば、中国に対する違和感も少しは解消されると思う。

橋爪さん それは簡単でないと思えます。米中では日本に対する戦勝国です。敗戦国でありながら中国に大きな顔をして進出したという都合の悪い国は日本だけです。敗戦や植民地支配など過去の問題について一人一人が反省を続ける以外にないが、簡単にできる作業ではない。

山下さん 従軍慰安婦問題などをみても、あおり立てるようなイデオロギイ的な論調が多い。「サンサーラ」で霍見さんが指摘しているように、日米中関係や東アジアでの日本のあり方を考える時、結局は「民主社会に不可欠の市民」の誕生といたった日本の国内の問題に結び付くべきなのですが、中西さん 問題は日本のメディアです。米中関係の報道を見ても、昨年3月には「すわ米中対決」で、今は「頭越される」と、右に左に大きく振り子が振れる。メディアも含め日本人のどちらか一方は非常に懐が浅い。

橋爪さん そういふメディアの情報をもとに読者大衆にも責任がある。日本が感情的に迷走するのはスタンスが取れないから。米中に対する関係に心の中で決着がついておらず、「市民」としての自覚がないから、自分の欲望をそのまま正当に要求していかねばならない。国際関係でも利益として何を主張すべきかわからない。だから、センセーショナルリズムや土下座外交になり、スタンスと主体性のはっきりしない行動を取ります。ますますあざむかれることになる。

山下さん 「現代」で岸屋さんは、日本が自ら表現できない国になっているなど指摘しています。米中やアジアとの関係も、まず日本が官僚の腐敗や安全神話の崩壊といった地盤沈下からイメージチェンジしなければ。

中西さん 日本人が中国やアジアの挑戦の文明的な意味を正しく理解する必要があります。日本が、よって立つ基礎を考へるのだから歴史と文明だと思えます。

橋爪さん 中国を脅威と思うのは、日本人の共感能力が低下している現れだと思えます。今調子が悪いから被害者意識になっていますが、調子がいい時は裏返ってご機嫌になる。重要なのは被害者意識に駆られて脅威をおおりに立てるのではなく、やるべき国内の改革をしつかりやることです。

▽なかにし・てるまさ 京都大学教授 (国際政治学)

▽はつめ・だいさぶろう 東京工業大学教授 (社会学)

▽やました・えつこ 女性史研究者

自由帳

7日、テレビ朝日の記者(26)が、ゲリラの占拠するペルーの日本大使公邸を「突入」取材するという、驚くべき事件が起こった。

年末にも共同通信のカメラマンらがゲリラの占拠で邸内に入り、人質の解放を遅らせるなど非難を浴びたばかり。未だで知らぬ記者の暴走にはあきれが、そんな記者を訓練

あきれた「突撃取材」

これは、双方を自由に取材するの当然だ。中立が保障されるのは、カトリックの神父や赤十字など、特別な「自主的に」出国された。日本のマスコミが名譽と信

なかに現場に送った本社の責任は重い。日本のマスコミには、思い違いがあるようだ。報道は公正中立、安全も保障される。政府とテロリストが対立してぶちこわしになる。マスコミは事件の当事者なのだ。中立が保障されるのは、カトリックの神父や赤十字など、特別な「自主的に」出国された。日本のマスコミが名譽と信

(橋爪大三郎)

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて3月号)

中西 輝政	山下 悦子	橋爪大三郎	編集部
①日米中新時代に和漢洋の教養と修養を(船橋洋一) =フォーサイトNo.1 日米中の「三角外交」時代のあり方について の最近の最も透徹した論文 ②市場化される日本のメディア産業(音好宏) =世界 ひたひたと進むテレビの多チャンネル化革命 とそのインパクトを詳しく紹介	①パワー・シフト——グローバル市民社会の台頭(J・T・マッシュス) =中央公論 トランスナショナルな様相をおびる情報化時代のNGO、多国籍機関、国家の関係を追究 ②特集 <生きにくさ>という問題(川本隆史、西山明、河合準雄ほか) =世界 学校、家族、社会の「今」。元オウム信者を取り上げた西山氏のルポは深く考えさせられる	①総力特集 日本株式会社が立ち腐れてゆく(水谷研治、水野隆徳、岸宣仁ほか) =現代 低落する株価、迷走する官界、危ない金融機関……。生き残りを賭けた「生活防衛術」の数々 ②鼎談 愚かなる韓国の反日感情(崔吉城、呉善花、鄭大均) =正論 親日的な韓国人も多いのに、世論は反日一色。日本の進歩派は韓国の反日に飛びつく	①戦後は終わっていない =ニューズウィーク 2/26 欧米で広がる、戦時下の事実を究明し責任を問う動きをレポート。冷戦終結が背景に ②対談 ビジネスマンのための複雑系講座(田坂弘志、倉都康行) =エコノミスト 2/25 市場と経営にまで浸透し始めた複雑系の考え方。指し示すところは未来創造と規制緩和

雑誌を読む

2月

教科書論争

- ◆特集 ここがおかしい! 歴史教科書論争(藤岡信勝、吉田裕、林健太郎ほか) =THIS IS 読売  
「自虐」と言って誤りを認めないのは「自卑だ」(林)
- ◆特集 歴史教科書批判への反論(長山靖生、大塚英志、家永三郎) =論争  
教科書批判に感じる左翼に対する被害者意識(大塚)
- ◆「新しい教科書」は国史の不可能性を乗り越えられるのか(宮崎哲弥) =論争 東洋経済  
「歴史」を語り継ぐことこそ意義ある歴史伝承のかぎ
- ◆インタビュー 「強制連行」疑問発言の矢面に立って(櫻井よしこ) =正論  
加害者責任に比ベシベリア抑留などの被害には寛容
- ◆特集 公娼論に反論する(吉見義明、鈴木裕子) =世界  
一カ所でもおかしいと証言を全否定できるか(吉見)
- ◆対談 「アジアのルサンチマン」を理解できない歴史論議の危険性(佐高信、辺見庸) =サンサーラ  
教科書を批判する論者の敵は戦後民主主義(辺見)

山下 背景に保守の危機感

橋爪大三郎さん 今春から使われる中学校教科書に「従軍慰安婦」の記述が登場するとうことで、大きな議論になっています。過去の教科書問題と違うところは、「自由主義史観研究会」をつくらした藤岡信勝さん、漫画家の小林よしのりさんら、見直しを求める側に「歴史修正主義者」という新しいタイプの論者が現れ、多くの支持者を集めていることです。これに進歩的左派や、フェミニズムの人々が反対するという



山下悦子さん



橋爪大三郎さん



中西輝政さん

橋爪 個人が歴史の主体に

第二は国際関係にどう反映されるか。特に米国やアジア諸国の反応をどう考えるか、という点。三つ目は、教育や歴史叙述のあり方への態度です。それらの局面で、藤岡さんをはじめとする修正派と、従来の教科書路線を正ししようとする戦後派の対立が鮮明に出ている。私の考えは、歴史的事実の認定、立証については、強制連行の事実そのものを裏証する文書がないことは確からしい。しかし、だから強制連行はなかったとはいえない。国際関係への影響については、日本の安全保障の観点から考えて、誤解を招く論争を避けたい。THESIS 読売「林健太郎さんは、東京裁判史観」批判をする日本の国際的立場が成り立たないといっています(教科書で書へべき歴史が、どうにかして修正派に欠けている視野です。教育の見地からいえば、従軍慰安婦について教えるのは中学生には早過ぎる、誤解を生む。歴史教育という観点では、藤沢法映さんの「アジアの隣人たちの

中西「人道」基準の視点を

構図ができています。「保守対革新」の対立を敷きながらかも、それで説明しきれない対立関係になっていきます。山下悦子さん 雑誌によっても、はっきり分かれていて、「諸君!」「正論」「サビオ」「発言者」などが保守派の舞台となっているのに対し、「世界」「週刊金曜日」「論壇」などは、戦後の自由・平等・民主主義の教育理念やフェミニズムの観点から従軍慰安婦を性奴隷とみなし、日本軍の行為を批判する立場の論者を起用しています。この問題が急浮上した背景には、保守派の危機感が根底にある。「論争 東洋経済」で宮崎哲弥さんも取り上げています。「新しい教科書」は国史の不可能性を乗り越えられるのか、桂秀実さんが原理的にとらえているように、「祖国のために死ぬ」という観念が成立しなくなった今、保守派の主張が支配的になるということはありません。その主張に違和感を覚える人、あるいは無関心な人が多いと思う。中西輝政さん この論争では三つの

自由帳

3月8日は、世界女性デーである。日本国内の雑誌の世界では、「家」潰しになる「共産化」運動の一つは、日本共産党や元共産党が全力をあげている夫婦別姓問題です。「女性の道徳性は、家制度」である。……その末期的兆候の一つが女子中高生の売春・ブルセラで、高生(高松永一、中川八洋対談「サンサーラ」といって、よつな時代錯誤だしい論調(男性の道徳性はなぜ問われな)か。女子中高生の売春もブルセラも援助交際も買っ男性があつて初めて成り立つのだ。別姓選択制は若い女性たちの結婚観、意識の変化とも関連が自立しているが、フェミニズムの思想や活動は、現実の日本社会に確実に浸透している。同時に、世界の女性たちのネットワークも広が

どについて議論しているのだ。いった自らの「身体」(内なる環境)の危機の視点から環境問題を追究する女性たちも増加している。上野千鶴子、緒方礼子両氏を編者として、世界各国の女性たちが執筆する「リプロダクティブ・ヘルスと環境」共に生きる世界へ(「工作舎」を讀む「マ」ルフェニエ/エコフェニエ、近代/反近代の対立図式を乗り越えた新たな地平に向けてフェミニズムが進んでいるのが理解できる。)

山下悦子

対話を(同)が国際関係の視野も含めてバランスよく述べています。橋爪さん 歴史的事実について注意に結論を出す時期ではないが、歴史や教育に対するスタンスをはっきり持つ必要がある。「諸君!」の秦都彦さんの「慰安婦と七三部隊」合体の仕掛け人は、慰安婦の補償に関して、国家補償派と民間基金派との複雑な対立や、日本の活動と韓国での受け止められ方のずれなどの構図を説明しています。「論争」の特集「歴史教科書批判への反論」で、大塚英志さんは、歴史と一人一人が生きていることとの関係について論じ(オウムと教科書批判の罪、長山靖生さんは、歴史を教えることと愛国を教えることを切り離そうと述べています。「物語」と歴史を混同するな)。

中西さん 1931年の満州事変を大きな分かれ目と考える論者が多いのですが、それ以前でも日本の朝鮮支配などは苛酷すぎた。従軍慰安婦についても、当時の遊郭制度などを引き合いに出して「あれは戦場だっただけ、同じことだ」という論法は連行の有無と関係なく人道論、正当化できない。山下さん 藤岡さんたちが戦争責任の問題をおさなりの形に戦後の歴史教育を否定するのは納得できません。また、彼らとは違った観点からで

国が韓国の婦女子を保護する義務を怠った責任から考えてはどうか。日本が韓国を統治していたからこそ、その期間における責任が生じるし、請求権も生じると考えられるわけだ。

中西さん 国際法は国内法と違い力と力によって決まる正義という面があり「合法」というより「秩序」です。国際的に一番強い議論は人道です。何人が道に反するかを考えていくほうが議論を前向きにする。

山下さん フェミニズムの視点からいうと、男性の性的欲望が国家政策に組み込まれ、恣意的に操作されるという戦争におけるセクシュアリティの問題がある。藤岡さんたちの言説には男尊女卑的な価値観が定着して、すぐ抵抗感がある。鈴木裕子さんは「セカンド・レイプ」にほかならない(世界)で、秦都彦さんの発言を引用して「戦争にはレイプはつきもの」「若い兵士たちに適当な女性の捌け口は当然といわなければならない」と述べていますが、性暴力、レイプが解決すべき女性問題として注目されている国際社会の流れを考慮されて、「戦争だからこの国の兵隊もやっている」として免罪されるものではない。

中西さん 世界を見ても、旧日本軍ほど非人間的な秩序で兵士を支配した軍隊はない。ただし、日本軍の残虐行為のエピソードが孤立的に、戦争体験を持つ世代と接点のない若い世代に肥大して伝えられることも問題がある。修正派の主張の中で重要なものは「バランスを取れ」といっていることです。橋爪さん しかし、最近の藤岡さんたちの言動は、自らバランスを崩す方

# 雑誌を読む

3月

## 金融構造改革

- ◆金融崩壊 五つのシナリオ (斎藤精一郎) =文藝春秋  
ビッグバン構想より足元の金融危機への対策が先決
- ◆日債銀と北拓銀のXデー (有森隆) =文藝春秋  
金融市場拡大と国際化で「バクチ」の才能、が必要に
- ◆「金融債」は保護すべきではない (中北徹) =フォーサイトNo.3  
不用意な公的資金導入発言はモラルハザードを招く
- ◆対談 経済成長2%でいいじゃないか (飯田経夫、江坂彰) =諸君!  
高度成長のクセが抜けないから不安なだけ (飯田)
- ◆緊急特集 日本の破局 (豊田章一郎、堺屋太一、大前研一、水野野隆徳ほか) =ボイス  
クラッシュを起こせば日本金融を再生できる(大前)
- ◆対談 ビッグバンで市場は守るが、企業は守らない (田原総一朗、神原英資) =サンサーラ  
悲観論に潜むアイデンティティ・クライシス(神原)

### 橋爪 合理性回復を急げ

橋爪大三郎さん 「文藝春秋」の斎藤精一郎さんの「金融崩壊 五つのシナリオ」が全体の見取り図としてよかった。金融構造改革と不良債権問題は別の話だ。構造改革は、家が傾いたら古くなった基礎工事を新しく建て直そうという中長期的課題。それに対して、不良債権は今すぐに片付けなければならない「生ゴミ」問題だとしています。竹中蔵さんの「日本版ビッグバン」で何が変わるのか(潮)は、「ビッグバン」の本質をよ



中西輝政さん



山下悦子さん



橋爪大三郎さん

### 山下 悲観、楽観が対極に

北さんのように、危機を乗り越える方法・手段の提言もありました。もう一つは、金融危機を大したことはない、と打ち消すもので、小堀隆士さんの「株主フル安復合不安症候群(中) 中央公論」や飯田・江坂対談、須田さんの論文などです。総じて、具体策をクリアに打ち出したものが少なく、実情紹介やルポ、責任追及だけが終わって、いるものが目立ちました。

### 中国の運営に危機感

え、金融債の元本保証などは、やっではない。『フォーサイト』で中北さんが木津信用組合の例を挙げてますが、行き詰まった金融機関が高い金利で預金をかき集めるといったモラルハザードを防ぐ仕組みを作らなければいけません。ペイオフや情報公開です。そのうえで、企業はつまずくが預金は保護する。公的資金を投入する以上、返すわけにならない方策を本気で考えておかなければ。

### ◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて4月号)

橋爪大三郎	中西 輝政	山下 悦子	編集部
①密約外交の代償—慰安婦問題はなぜこじれたか (櫻井よしこ) =文藝春秋 謝罪を決めた河野洋平、石原信雄氏らに取材。証拠もなしに強制連行を認めた政府の失態	①SFCと漱石と私—慶應義塾大学最終講義 (江藤淳) =ボイス 現在進行中の大学改革のあり方を、根本的な人間観・教育観から改めて問い直す	①特集 「女子保護規定」撤廃 毒か薬か (篠塚英子、福沢恵子ほか) =週刊金曜日3/14 雇用機会均等法と労基法の「改正」案が本格審議に。「保護規定」撤廃の是非について議論	①特集 鄧小平なき中国(H・キッシンジャー、C・パッテン他) =ニューズウィーク3/5 元米国務長官の回想や、香港総督の寄稿を含む充実した特集。中国の将来を多角的に展望
②僕が「新しい歴史教科書をつくる会」を助太刀する理由 (大月隆寛) =正論 「おやじ、でなく」女・子ども、が国家を語らないとダメ。右翼扱いには覚悟して、僕はやる	②それでも日本は海洋国家か (中野不二男) =中央公論 日本海重油事故が暴露した高度技術国家日本の知的・戦略的欠陥を突く	②徹底特集 年金破産・銀行倒産に耐え忍ぶ「護身術」 (横山遜、鎌田祐治ほか) =現代 成長、銀行、土地の3神話が崩壊した時代を生きるための具体策を提示。一読の価値あり	②維新・復古・進歩—「改革」の思想的基盤をもとめて— (坂本多加雄) =発言者 単なる「新しきもの」の創造を超える「改革」の意味を、明治維新を支えた論理から照射する

### 自由帳

「アジアの世紀」とか、「アジアが危ない」とか言っている間に、世界はアジア以外のところまで再び大きく動き出す徴候があらわれ始めた。もちろん、アジアの発展は今後も長期にわたって続き、その行方は世界的な変化を意味するものを含んでいる。その間は、アジアの歴史を振り返る必要はない。また、鄧小平氏の死や黄長輝書記の任命など

### 世界が再び動き出す徴候

あった世界をいくつもの「世界」に分けつつあるのと同じように、一つの地域の変化が独特な形で、深くかつ大きく他の地域に及ぼすようになってきた。会議の最大のテーマは、Nを除く米国の底流にある世界

にあって、中国政治の行方や朝鮮半島情勢が、まさに目撃できる。ヘルシンキで行われた米露首脳会談は、「病むな合意には至らず依然として人々を我人の出会う」と一部で指摘されたが、たとえ、かある結果ではあったが、それが日本に影響するところではある。「深く大きい」ものがある。アメリカ外交の大動向は、ロシアの強硬化と共に、長期的に見てもNATO自体の空洞化をもたらす危険があるからである。ワシントン

(中西輝政)

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて5月号)

山下 悦子	中西 輝政	橋爪大三郎	編集部
<p>①植谷雄高の死——「死霊」は現在に届くか(芹沢俊介) —正論 「死霊」の文体の断層に時代の姿を捉えそこの作家の姿を見いだす斬新な追悼評論</p> <p>②対談 だから文学にこだわりたい(石原慎太郎、辻仁成) —中央公論 芥川賞作家辻は故尾崎豊と音楽仲間。「NY」に行ったら尾崎のことを書こうと思っている」</p>	<p>①「中国脅威論」に惑わされるな(R・ロス) —中央公論 アメリカの主流派の中にある慎重で賢明な中国観として重要</p> <p>②対談 「NO」といえる中高年(江坂彰、堀紘一) —ボイス 無責任な経営者と、いまだに学歴志向の教育ママに対する警告</p>	<p>①集中連載 公安警察 VS オウム——日本の治安、かくして崩壊す(川邊克朗) —現代 早くからオウムをマークしながら相手を甘く見て、タイミングを逸した公安警察の舞台裏</p> <p>②融解を速める「社会主義」(渡辺利夫) —中央公論 鄧小平亡き社会主義市場経済は国有企業解体→共産党の行き詰まり→経済破局へ進む?</p>	<p>①東京裁判をやり過ごした日本人(関野野) —論座 近代の自由主義の基本である法の論理と罪の論理から、「自由主義史観」を原理的に批判</p> <p>②大杉栄 自由への疾走&lt;完結編&gt;(鎌田慧) —へるめす 大正期活躍したアナキストの生涯を伝えた。現地取材などを通し綿密に検証。前号の続き</p>

雑誌を読む

4月

- 「沖縄」の論じ方
- ◆日本はアメリカの植民地か! (ビル・トッテン) —文藝春秋  
「打ち出の小づち」の役割を負う日本は今も米国の植民地
  - ◆沖縄県民よ、甘えるな(眞榮城守定) —文藝春秋  
経済発展の阻害要因は基地より公共事業への安住だ
  - ◆沖縄 草の根の声を聞け(島田晴雄) —中央公論  
本土が沖縄の痛みとコストを分かち合う必要がある
  - ◆沖縄「反基地運動家」の呆れた正体(恵隆之介) —諸君!  
反基地運動の思想的リーダーがチュチュ思想を信奉
  - ◆憲法と沖縄の現実(新崎盛暲) —潮  
手続き進行中に法改正されるのでは法治国家でない
  - ◆沖縄に忍び寄る朝・中・台の影 —選択4月号  
沖縄を中心とした経済圏構想に潜む「琉球独立論」

中西少ない安保環境論

中西輝政さん 沖縄の米軍基地をめぐって駐留軍用地特別措置法の改正問題が日本の政治を揺るがしています。今月の雑誌では、沖縄県民の日常生活や経済発展の問題など基地の矛盾・重圧をルポふうに取り上げたものが多かった。「文藝春秋」の眞榮城守定さんの「沖縄県民よ、甘えるな」や「潮」の新崎盛暲さんの「憲法と沖縄の現実」、論座の佐藤木俊郎さんの「すしり重い沖縄の旅」復帰四半世紀への刃」などです。日米安保体制やアジアの安保環境をどう考えるかを本格的に取り上げた論文はなかった。特に、海兵隊撤退論などを軍事専門家がいまさらと議論したものは登場していません。二番目に、議論が反戦地主義運動の担い手の問題に集中し、運動の主体からの目を紹介したものと、同じグループに挙げられます。また、本土の責任を論じたものが少ない中で、沖縄問題懇談会の座長を務める高田晴雄さんの「沖縄 草の根の声を聞け」(中央公論)を注目で読みました。沖縄の負担を軽減しなければという問題意識から、各市町村の状況などを紹介しています。米側でこの問題がどうとらえられているか、日本のマスコミが注目してきませんでした。

橋爪 定型的発想破るルポ

橋爪大三郎さん 沖縄については、基地が多くて気の毒だ、申し訳ないといったイメージが本土側にあり、突っ込んだことが言えないというパターンがある。そのパターンを委ねようとするルポが目立った。例えば「文藝春秋」の佐久間さんの論文は、3000

山下 経済発展を阻む基地

山下さん 「軍事目的最優先で地区の平坦な一等地が収用されたため、地域の経済、交通、生活上のいわば生態系が分断され、経済活動や人々の生活が著しく阻害され抑制されている」という島田さんの指摘は重要だ。政府がこれら沖縄に対して社会資本を立ち立てている状況を取戻せるのか。橋爪さん 嘉手納町は80%が飛行場で発展のしようがない、金武町などもそうです。だが、那覇市など影響の少ないところもある。残りの場所ですべてをどうやっていこうかという眞榮城さんの議論は説得力を感じます。



左から中西輝政さん、山下悦子さん、橋爪大三郎さん

自由帳

3月11日、東海村の動燃動力炉・核燃料開発事業団事業所で火災が発生。鎮火したはずが、残りの火がアスファルトに引火し爆発、低レベル放射能が飛び散る大事故となった(サンデー毎日4/6) ウソつき動燃の「義務と演技」(など)。この動燃は、鎮火の確認を怠る通報も遅れたなどの不手際に加え、虚偽報告

動燃をどう再生させるか

や口止め工作を行っていたことが判明、4月16日に科学技術庁は告発に踏み切った。国民の安全をこのけ、組織防衛を優先させてしまった動燃の体質に、非難が集まっています。動燃の解体・再編は、やむをえない。ただし、看板を掛けかね組織をいじくっただけで、またも組織になることを期待するならば、失敗の原因を究明すべきだ。

(橋爪大三郎)



◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて7月号)

<p>橋爪大三郎</p> <p>①村上春樹と麻原彰晃(大塚英志) —ボイス 地下鉄サリンの記録「アンダーグラウンド」は、成功したサブカル批判か、凡庸な転向か ②「T・K(小室哲哉)」はなぜ巨大産業に化けたのか(滝田誠一郎) —現代 メガヒット連発の秘密はカラオケBOXとシンセサイザー。「聞かれる」ことへのこだわり</p>	<p>山下悦子</p> <p>①48歳ビジネスマンが書き残した「余命百日」のスケジュール表(加藤仁) —諸君! がん告知をも「死の準備」という大仕事にかえてしまう猛烈サラリーマンの闘病日誌 ②対談「移植OK」で始まる臓器争奪地獄(近藤誠、中島みち) —文藝春秋 臓器移植法が成立した。患者の権利、自衛の立場から脳死や移植の是非を問う必読対談</p>	<p>中西輝政</p> <p>①特集 米中徹底対論(R・マンロー、張小波) —This is 読売 米中対立は深まるか。両国の強硬派による論戦だが、日本にとり第一の関心事 ②絶対不敗の技術力(唐津一) —ボイス 今の日本には自信回復が必要。製造業の活力こそ国力の基盤であることを教える</p>	<p>編集部</p> <p>①文明の衝突か、相互学習か(佐藤誠三郎) —アステイオン夏号 産業化とナショナリズムという近代化の根本的な動向から、ハンティントン分析を批判 ②「死刑判決?私には関心がない」(宮崎勤) —創 連続幼女殺害事件で死刑判決を受けた被告に判決後、文書を通じて行われたインタビュー</p>
---	--	--	--

雑誌を読む 6月

**青木前大使ハッシング**

- ◆我、ペルーの土と化すとも(青木盛久) —文藝春秋  
ハッシングの渦中の人物が書いた詳細な事件の手記
- ◆検証 公邸突入と日本外交(川見勝男) —世界  
日本の大使、領事は「エンペラーのように振る舞う」
- ◆「青木叩き」と情緒報道の歪み(井沢元彦) —This is 読売  
無事救出まで責任追及を控えていたなら無用の遠慮
- ◆いま、あえて青木大使擁護論(石川好) —宝石  
事前に武力突入の要請があった時の準備こそが問題
- ◆特集 検証!ペルー報道—フジモリ礼賛報道の危険(人見剛史、原田浩司、浅野健一ほか) —創  
ハッシングは青木氏に責任を転嫁したことに(浅野)
- ◆対談 愛国心について(大塚英志、福田和也) —中央公論  
保守論壇全体があまりにも世論に墮している(福田)

中西解決後の急転は問題

中西輝政さん、ペルー人質事件での青木前大使のハッシングに関しては、論点が三つあります。一つは警備上の責任。もう一つは、青木氏と日本の外務省が「平和的解決」を唱え続けたこと。三つ目は、青木氏の人格に対する個人的攻撃。本来は別問題の三つが絡まっています。このうち最も大事なポイントには、専ら平和解決を志向することの是非です。一般的に在外公館や日本企業がテロの対象となった時にどう対処すべきか。青木氏自身、「文藝春秋」



橋爪大三郎さん



山下悦子さん



中西輝政さん

か、「創」の特集「検証!ペルー報道」の浅野健一さんの「ペルー政権こそテロリストではないのか」など批判もありました。

山下悦子さん 石川好さんがいまあえて青木大使擁護論(「宝石」)で青木氏を擁護しているのが目立ちました。ハッシングの背景には、官民の格差に対する庶民のおん念がある。大塚

省や厚生省の不祥事などが続いた後に、今度は外務省の大使の実態が事件を通して見えてきた。だからマスコミがハッシングを支持されたと思う。「世界」で川見さんは「エンペラー」のように振る舞う大使たちと指摘し、橋田枝里さんは「私に『平気です』をうたった青木大使の傲慢」(「諸君」)で外交官の村上意欲を批判、徳岡孝夫さんも「新潮45」6月号で歴史的な例を挙げ、「立派な人もいるが、一般に日本の外交官の眼中には『民権』も『国家』もない」としています(「覚悟」の研究)。国家の問題では、福田和也さんが社説で成さんとの対談「暴力に対する想像力」(「ボイ」)で「シヨックだったのは、日本国の総理が始めから終わるまで一度も戦う姿勢を見せなかつた」と述べています。危機管理や国家の問題について、従来の保守の枠組みにない若い世代のいざなひが語られている。事件の解決の仕方にも国としての責任主体がないと、危機感を持つ人が多かった。

中西さん 保守の言説は本来、責任の重いもの、という自覚が大切。問題はサブカルチャー的なところから出てきたある種の軽蔑です。例えば、1930年代の日本の新しい国家主義は、明治・大正期の国家主義とは似ても似つかないサブカルチャー的なもので、それを軍部が利用し左翼もそれに乗った。その点、橋本首相が強行突入直後の記者会見で、日本政府の承諾なく日本の領土である大使公邸に突入したことに対して「遺憾の意を申し上げた」と述べたのは、日本の国家としての体面を守るどころかキリギリの一言だったと思います。

橋爪さん 私は、事前の通告なしに武力突入になったのは信義違反であるという意味の「遺憾」であつたと思えます。「諸君」で江藤淳さんは、ウーイン条約のポイントは在外公館が不可侵を主張して守ること、接受国

がその不可侵性を保障することで、この面々の努力が相まって外交が機能していくとしています。今回の場合、日本国としては、主権を発動してテロリストグループを自ら排除するか、ペルー政府に解決を任せるかの二つしか対応はない。ところが、日本は憲法によって外国に武力を派遣できないので、ペルー政府に任せざるしかありません。

中西さん 「This is 読売」で井沢さんは、「もし人質に多数の犠牲者が出たら、評価は大きく変わったろう」とした新聞記事に疑問を投げかけています。私は、突入でなくさんの人質が死んだら大きな批判が出たろう、と決めるのは問題だと思ふ。もちろんゲリラ側の残虐性に対する批判は起すと思いますが、日本人は湾岸戦争以来、国家性を考え始める。当然それは犠牲と裏腹です。

橋爪さん 「世界」で川見さんは、大使公邸を制圧した後、仕掛けられていた盗聴器をペルーの軍隊が取り出した可能性もある。また、犯人を処刑したりしていたのではないかと書かれています。これは、重要な疑惑としてマスメディアは調査報道しなければならぬ。

山下さん 徳岡さんが「新潮45」で「仲間を調べる調査の杜撰さ」を思い合わせ、私は外務省調査委員会に期待していないと指摘しています。

中西さん 堀山官房長官が解決後、「いつも辞表を優にしていた」と話しましたが、日本人の人質が死んだらといってつねに政府が責任を取らなければならぬ性質のものではない。こういう事件はいつか起っても不思議ではない。再発防止の手段は採らなければならないが、事件を当たり前のことと考へた時に初めて、危

山下背景に庶民のおん念

橋爪 保守的言論、流行に

の手に「我、ペルーの土と化すとも」で個人的責任や自分の思いは述べていますが、この問題については議論の先送り行われていない側面がある。一方、この事件から国家論を展開したが、江藤淳さんの「総理と天使の不機嫌」(「諸君」)や、佐伯啓思さんと松本健一さんの対談「漂流罪と国家意識」(「正論」)などです。ペルーの政治状況を考えれば武力解決はなかったわけですが、井沢元彦さんの「青木叩き」と情緒報道の歪み(T his is 読売)は日本のジャーナリズムが事前にその見通しを書けなかった理由を、日本人の「言説」の文化に触れながら述べています。また、メディアの青木氏評がハッシングへ急転した現象を問題にし、事件解決前から青木氏の責任を問うべきで、解決後に責任を問うのはおかしと指摘しているのは重要です。武力突入に対しては、「世界」の川見勝男さんの「検証 公邸突入と日本外交」や大塚和雄さんの「武力突入しかりえなかつたの

とになる。八〇年代から続いた保守優位の流れが大きな転換期に至つたのか。ペーリンの壁が崩壊して、社民路線も含め左派や社会主義は、すでに歴史的な退潮の流れにある。英

中西さん 保守の言説は本来、責任の重いもの、という自覚が大切。問題はサブカルチャー的なところから出てきたある種の軽蔑です。例えば、1930年代の日本の新しい国家主義は、明治・大正期の国家主義とは似ても似つかないサブカルチャー的なもので、それを軍部が利用し左翼もそれに乗った。その点、橋本首相が強行突入直後の記者会見で、日本政府の承諾なく日本の領土である大使公邸に突入したことに対して「遺憾の意を申し上げた」と述べたのは、日本の国家としての体面を守るどころかキリギリの一言だったと思います。

橋爪さん 私は、事前の通告なしに武力突入になったのは信義違反であるという意味の「遺憾」であつたと思えます。「諸君」で江藤淳さんは、ウーイン条約のポイントは在外公館が不可侵を主張して守ること、接受国

民も実はよく知っている。本当に歴史が動くとき、むしろ大きな反発や反作用が起きないはずはないのである。

今後ドイツにおいてさえ、同様の動きが出る可能性はある。何となく歴史を前へ動かす力は動きつけ、それ故に反作用を生む。それに引きかえ今の日本では、歴史を前へ動かさんとする力が感じられない。作用と反作用が激突する季節の到来が待たれる。

(中西輝政)

機管理を考へる現実的な感覚ができていくと思う。

山下さん 佐々淳行さんは「選挙」6月号で、今回の事件や阪神大震災、サリン事件、O157騒動などの非常事態が発生した際に「停止条件付きの非常大権」を首相に付与する行政機能の改革を提言しています(「エクセレント・ディビジョン」)が、実際にはそうした動きは出ていない。

中西さん メキシコの誘拐事件で平気でカネの解決をしたような、在外日本企業の暴力に対する姿勢の弱さ、それを支える利益、辺境の経営は、事件の隠れた要因だと思います。

.....

なかにして下さる。京都大学教授(国際政治学)

やましたえつこ 女性研究者(東京工業大学 学教授(社会学))

自由帳

ある知人が、「最近のヨロップの動きは、どうも不可解だ」と語った。五月のイギリス総選挙で保守が大敗し、十八年ぶりに労働党政権が生まれた。そして六月には、フランスでも社会党内閣の登場を見た。その結果、EU加盟の十五カ国中、十三カ国で、従来「左派」と目されてきた政界が政権に参加しているこ

左派勝利という「反作用」

と想っていたら、これは一体、どういふところか、とどうも疑問に思ふ。ここに、歴史の動きを見るとき、大切な視点を持つべき事例があるように思われる。

まず、英国での労働党の勝利と、フランスでの社会党の伸張はその意義を、実は大きく見落している点を押さえておかねばならないだろう。英

改革の動きは、「痛み」をつのらせた有権者のいわば「反射的」反応が左派への投票に走らせたといえる。同様の現象は、イタリヤや北欧、さらには旧社会主義圏の東欧でも見られた。しかしだからと言って、かつてのやり方に戻れるはずはない、ということも、ロシアを始め、この欧州国

民も実はよく知っている。本当に歴史が動くとき、むしろ大きな反発や反作用が起きないはずはないのである。

今後ドイツにおいてさえ、同様の動きが出る可能性はある。何となく歴史を前へ動かす力は動きつけ、それ故に反作用を生む。それに引きかえ今の日本では、歴史を前へ動かさんとする力が感じられない。作用と反作用が激突する季節の到来が待たれる。

(中西輝政)

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて8月号)

橋爪大三郎	中西 輝政	山下 悦子	編集部
<p>①特集 朝鮮半島 乱気流 (W・テイラー、朱建栄、李英和ほか) —This is 読売 専門家15人の近未来予測はけっこうばらばら。予断できぬ状況のなか、軌えが進行する</p> <p>②「酒鬼薔薇」はボクの代わりに捕まった (岡田斗司夫、大槻ケンヂ) —週刊アスキー7/21 皆の代表で捕まってくれた彼はイエス・キリストのようなもの、と両氏。それも真実かも</p>	<p>①米中関係が香港の将来を決める (H・ハーディング) —This is 読売 アメリカの視点からではあるが、各種の香港論の中で、最も急所を押さえた好論</p> <p>②ビッグバンは大丈夫か (藤井良広) —中央公論 日本の金融界にとって、ビッグバンがビッグクランチ(金融大混乱)にならないために</p>	<p>①特集 アジア・プロブレム (原洋之介、佐伯啓思、高澤秀次、桂秀実ほか) —発言者 国柄に見合った経済システム、開発主義はアジアの価値を残すのか……新アジア論が満載</p> <p>②保育園が変わる (今井文恵) —世界 6月の児童福祉法改正で保育園における国の責任は大きく後退する。保育園の今後を分析</p>	<p>①特集 沖縄独立をシミュレーションする (小川和久、姜尚中ほか) —広告批評7・8月号 国家の枠組みが崩れつつある中で、州制度導入など現実的な「独立」の可能性を検証する</p> <p>②対談 日本研究と文化研究 (H・ハルトゥーニアン、酒井直樹) —思想 「植民地的構造」をほらむ日本研究を批判しカルチュラル・スタディーズの重要性を探る</p>

雑誌を読む

7月

小学生連続殺傷事件

- ◆子どもたちはなぜ暴力に走るのか (芹沢俊介) —世界 いのちを絶対とする価値観から浮遊する子どもたち
- ◆「酒鬼薔薇」少年 十四歳の衝撃 (小田晋) —This is 読売 社会・教育一般の問題に拡散すると、本質を見誤る
- ◆酒鬼薔薇聖斗は時代の子か異常者か (高村薫、野田正彰) —文藝春秋 若者の人生のモチベーション喪失は日本的(野田)
- ◆連続対論「かくて『悪魔』は解き放たれた」(吉岡忍、日野啓三、小西聖子、大澤真幸ほか) —現代 「欠如」の欠如が自己顕示的な欲求の動機に(大澤)
- ◆「理由なき」犯罪 (野坂昭如) —ポイス 「群れへの埋没で自分を確立する」子供たちの矛盾
- ◆頭部第一発見者を「容疑者扱い」した大新聞 —週刊文春7/17 「第二の松本サリン」になりにかえなかつた取材攻勢

山下悦子さん 神戸の小学生殺人事件は、容疑者の少年と同じ1982年生まれの子供を持つ身として、逮捕はショックで、逮捕前、雑誌も新聞・テレビも容疑者像を30、40代として、目撃談などを報道して、いわけなければならぬ。『週刊文春7/17』によると、第一発見者を疑ったり、フイダショーの取材で情報ほしさに中学生に現金を支払われたりといったことも、過熱した報道の舞台裏であったよ



山下悦子さん



中西輝政さん



橋爪大三郎さん

橋爪 方向感覚失った社会

山下悦子さん 神戸の小学生殺人事件は、容疑者の少年と同じ1982年生まれの子供を持つ身として、逮捕はショックで、逮捕前、雑誌も新聞・テレビも容疑者像を30、40代として、目撃談などを報道して、いわけなければならぬ。『週刊文春7/17』によると、第一発見者を疑ったり、フイダショーの取材で情報ほしさに中学生に現金を支払われたりといったことも、過熱した報道の舞台裏であったよ

捕」と聞いて、大変驚きました。小田さんと野田さんとは、同じ精神医学者でありながら立場がかなり違っています。小田さんは、事件は個別的な要素が極めて高いのだから社会的影響や教育の問題に一般化してしまっている、少年法を改正しても容疑者が簡単に社会に復帰できないように手を打ったほうがよいとする。これに対して、野田さん

中西 健全さを保つる岐路に

山下悦子さん 神戸の小学生殺人事件は、容疑者の少年と同じ1982年生まれの子供を持つ身として、逮捕はショックで、逮捕前、雑誌も新聞・テレビも容疑者像を30、40代として、目撃談などを報道して、いわけなければならぬ。『週刊文春7/17』によると、第一発見者を疑ったり、フイダショーの取材で情報ほしさに中学生に現金を支払われたりといったことも、過熱した報道の舞台裏であったよ

子への愛護の過程、なご少年に関する情報を書いていたが、この事件では、家族とは何だったのかと考へられます。80年代以降の日本の家族は空疎化し、再生産システムがうまく機能していません。一見平和な家庭にもいろいろな問題がある。失楽園「不機嫌な異変」など不倫ものがヒットしているのは戦後の近代的家族像が破綻している証拠だ、こうした状況が何らかの形で影響している気がする。

自由帳

フォーカスの顔写真

新潮社の写真週刊誌「フォーカス7/9」が、神戸小6殺人事件の容疑者である少年の顔写真を掲載した。明白な少年法違反である。これに対し、キオスクなど販売店やコンビニ、大手書店などが販売中止を決定。販売した書店ではたちまち売り切れ、日本中の店頭から同誌が姿を消す騒ぎから同誌が姿を消す騒ぎ

きとなった。週刊誌「16」は、田島一昌編集長の「編集長取材メモ」本誌が問題写真の掲載を決定するまでの全経過と対峙する。何をすべきかを決定する。何をすべきかを決定する。何をすべきかを決定する。

「酒鬼薔薇」少年の顔写真を掲載した。少年法違反である。これに対し、キオスクなど販売店やコンビニ、大手書店などが販売中止を決定。販売した書店ではたちまち売り切れ、日本中の店頭から同誌が姿を消す騒ぎから同誌が姿を消す騒ぎ

橋爪大三郎

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて9月号)

中西 輝政	山下 悦子	橋爪大三郎	編集部
<p>①スハルト以後のインドネシア (A・シュワル) —中央公論 朝鮮半島・台湾海峡と並ぶアジアの不安定要因となってきたインドネシア情勢をレポート</p> <p>②橋本「米国債発言」の真意(高尾義一) —ポイス 現在のアメリカの「繁栄」が、きわどい綱渡りの本質をもつものであることを論じる</p>	<p>①医療費値上げの前に必要なこと・上(岩上安身) —世界 年平均33億円の不正請求をそのままに、患者の自己負担増を軸にした新保険制度への疑問</p> <p>②家庭科教科書に見る「家庭の崩壊」(佐藤光) —This is 読売 検定不合格となった4点の高校家庭科教科書の検証を通して、現代家族像のあり様を見る</p>	<p>①知的亡国論(立花隆) —文藝春秋 全国の大学が教養部を廃止中。一般教養(リベラル・アーツ)の軽視は日本を滅ぼす過ち</p> <p>②沖縄の未来像を考える(佐々木雅幸、高良倉吉、浜下武志、我部政明ほか) —世界 国際都市、自由貿易地域構想など、日本という国から世界の沖繩へ飛躍する提案の数々</p>	<p>①論議 歴史教科書、これだけは言いたい(山崎正和、坂本多加雄) —This is 読売 国家、教育、歴史は両義的な存在。ゆえに国家は歴史の評価にかかわるべきでない(山崎)</p> <p>②仮面中学生うむ「いい子競争」—アエラ7/28 「内申書」重視の高校入試の重圧の下で、中学生に浸透する「内申アップ」のマニュアル</p>

雑誌を読む

8月

「子供」と戦後社会

- ◆寂しい国の殺人(村上龍) —文藝春秋  
近代化が終わり、目標を失った「寂しさ」が原因だ
- ◆対談 子供は権威に飢えている(波部昇一、和田秀樹) —ポイス  
非行に走るのは母親が父親の悪口を言う家(波部)
- ◆対談 子どもへの「暴力」に立ち向かう(森田ゆり、斎藤次郎) —世界  
子供がすさんでいるのは「孤立」の表現だ(森田)
- ◆「心の教育」で子供は救えない(野田正彰) —潮  
「人材」の発想をやめ、可能性を開花させる教育に
- ◆戦後社会はA少年に対抗できるのか(佐伯啓思) —正論  
「人権」や「平等」に子供はリアリティーを感じない
- ◆灰谷健次郎氏が隠したもの(福田和也) —週刊文春7/31  
命の大切さという戦後日本人のスローガンは欺瞞だ

山下 戦後の「得失」検証を

橋爪大三郎さん 今月も神戸の事件を取り上げた雑誌が多くありました。興味をひかれた「つは村上龍さんの「寂しい国の殺人」(文藝春秋)です。「悲しい」という感情を軸に人々の連帯が形作られていた戦後復興から高度成長の時代が終わり、今は目標を喪失して「寂し」をキーワードとする個人が孤立した時代に至っていると感じています。ベストセラー「甘えの構造」の著者、土居健郎さんは「神戸少年殺人事件に思ふ」(ポイス)で、やはり



山下悦子さん



中西輝政さん

中西 価値観の分裂浮上



橋爪大三郎さん

橋爪 閉塞感打破が課題

このごろのような事件を生み出したなどとしていますが、家族の中で子供の教育や再生産のシステムを動かしているのは、女と男の関係性です。どちらかが悪いというところにはならない。母親のせいにするのは簡単ですが、父親のあり方の批判や反省がないのはおかしい。森田ゆりさんと斎藤次郎さんの対談「子どもへの「暴力」に立ち向かう」が、この点について具体的なプログラムを提示している。読者力を感じた。中西輝政さん 錯綜している議論のポイント、大きく分けて三つある。一つは、少年の特異性をどう見るかです。精神病理学の専門家には個人の精神や内面的特性に帰着させる考え方が多いのに対して、一方には教育やホーリーブデオの影響といった社会的背景を重視する考え方があり、この二項対立がはっきりしてきています。二つ目のポイントは、少年法改正や「フォーカス」の顔写真掲載をめぐる問題です。これについては、西部邁さんの「応報」という黄金律がある(諸君)や福田和也さんの「灰谷健次郎氏が隠したもの」(週刊文春7/31)、佐伯啓思さんの「戦後社会はA少年に対抗できるのか」(正論)が論じていますが、ここにあるのは、戦後日本のジャーナリズムで驚いた。彼の弁護人を務め、現在に至るまで接見や手紙のやりとりをしてきた遠藤兼雄弁護士です。七月十六日に彼からも手紙に対する報告を出したのが七月三日で、現在、日本に五四人の十一日だったというから、本

自由帳

待たれる「華」の刊行

八月一日、永山則夫死刑囚が絞首刑となった。享年四十八歳。八月十四日、死刑囚として異例の告別式が催された。死刑判決確定から七年たっているとはいえ、告知されてから数十分後の刑執行だったと、批判も出ている。私も刑が執行されたことをニュースで知ったのだが、あまりにも突然だったので、正直は、永山則夫君を、東京拘置所に送られた。彼の弁護人を務め、現在に至るまで接見や手紙のやりとりをしてきた遠藤兼雄弁護士です。七月十六日に彼からも手紙に対する報告を出したのが七月三日で、現在、日本に五四人の十一日だったというから、本年も二〇年もたっている死刑囚が一杯いるのに、権力は、他の三人とともに永山君を選んだ」と未成年者の犯罪に重罰を科すという風潮

「作家」でもあった。「無知の涙」(七一年)も新日本文学賞受賞の「木桶」(八三年)も、「殺人犯」の私小説という呪縛が自らにも強すぎて、私自身はあまり好きではなかった。環境に生まれ育ったあんな不幸な「大罪」を犯さないで済んだ人だったのでは、という印象を持った。死刑執行で未完となってしまった長編「華」の刊行が待たれる。

山下悦子

と事件まで共通して見られるように、暴力にも弱く、弱く体質です。企業にも父親がいないわけでは、そういう戦後日本の精神的特質についての議論として、こうした「母親」論は見ることもできると思います。

山下さん 「週刊文春」で福田和也さんは「人間の善性の象徴としての子供」を描いてきた灰谷健次郎さんが、そうした戦後の子供像を描く「事件の本質を掘り起こす」として、「フォーカス」を糾弾する行動に出た、としています。戦後社会を全面否定してしまおうという問題だと思いますが、戦後が獲得してきたものと失ってしまったものを検証し、何が失われ、なぜ失われたのか問われなければなりません。

橋爪さん 一特異な人間による犯行だから社会的背景は考えなくてもいい」という見方は、「社会的背景を十分踏まえなければ事件の構造は理解できません」(国際政治学)

はしづめ、だいさかづつ 東京工業大学 学教授(社会学)

やました、えつこ 女性史研究家

なかにし、てるまさ 京都大学教授







◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて12月号)

橋爪大三郎	山下悦子	中西輝政	編集部
①座談会「アジアのナショナリズムはどこへ向かうか？」(姜昌一、山室信一ほか) — 世界経済成長とともに強まるアジアのナショナリズム。あるべき協力関係を各国の学者が討論	①死刑囚永山則夫の「最後のノート」(遠藤誠、藤森研、阿部晴政ほか) — 論座死刑が確定した90年からのノート24冊のうちのはんの一部の掲載なのが物足りないが……	①行政改革とは何か(加藤寛) — ボイス行革がギリギリのかけっぶりがある今、その原点を再度強力で訴える議論	①28年前の「酒鬼薔薇」は今(奥野修司) — 文藝春秋当時15歳の高校生が起こした同級生惨殺事件のその後をたどり、少年法の問題を提起する
②「南京大虐殺」をどう読むか(福田和也) — 諸君! ジョン・ラベ日記を読む。日本兵の蛮行を省み、加害者として自らの罪を認める誇りを	②対談 環境NGOはいま何をすべきか(堂本暁子、M・ペロー) — 世界地球温暖化防止京都会議を前にした必見の特集「CO <sub>2</sub> —どうすれば減らせるか」の1編	②郵政民営化 火だるまの攻防(向谷進&特別取材班) — 文藝春秋このまま「幻に終わる」かも知れない行革への危機感から、密室の攻防を鋭くえぐり出す	②緊急企画 30歳以下のための新ガイドライン入門(野坂昭如、田中明彦) — 広告批評11月号日米防衛協力のための新指針の意味を反対・賛成双方の論客が分かりやすい言葉で再検討

雑誌を読む

11月

株暴落と景気失速

- ◆大不況を覚悟せよ(水谷研治) — 文藝春秋 右肩下がりを迎えた。改革を行い5年間は耐え忍べ
- ◆未曾有の大恐慌がやってきた(グループ21) — 現代 今の日本は60年前の世界恐慌下の米国にそっくりだ
- ◆「世界同時株安」で日本が敗れた「情報戦」(小暮史章) — フォーサイトNo11 「情報本位制」下の世界市場はリスク転嫁ゲームの場
- ◆「下降線」をたどり続けるほかない日本(ピーター・タスカ) — フォーサイトNo11 底に落ちないと「改革」に向かう危機感を生めない
- ◆平成大不況の深層(高尾義一) — ボイス 当局の景気判断には、歴史的な感覚が欠如している
- ◆東大阪工場群は不況知らず(中沢孝夫) — 中央公論 基盤技術の厚みのうえに成立する起業家の「孵化器」
- ◆特集 株価激震 — アエラ11/10 含み益消失による金融機関の貸し渋りが不安を増幅

橋爪 前向き施策、打ち出せ

橋爪大三郎さん 10月の世界同時株暴落が追い打ちをかけて日本経済は一段と底冷えする事態になってきました。政府も最近、景気判断を「緩やかな回復」から「足踏み状態」に変えましたが、単なる景気循環による後退局面ではなく、そこには構造的な要因がある。不況に直面し乗り越えていくため目先の手段にとらわれず到我慢せよと訴えかけるものに共感しました。水谷研治さんの「大不況を覚悟せよ」(文藝春秋)は、目先の景気対策で財政支出を求める圧力は必ず強くなるけれども、むしろ政府は歳出のカットをきちんとやり、消費税も20%まで引き上げ、5年間は耐え忍ぶべきとする処方せんです。もう一つは、「現代」の「未曾有の大恐慌がやってきた」(グループ21)で、グローバルスタンダードを取り入れて世界と競争できる体制の経済を作り直し、一から出直せという提案です。総じて、構造不況の原因や対策について、自信を持ってこれたことと納得させるものが見当たらない。

中西 価値観の变革が必要

中西輝政さん 月刊誌は、株暴落以前の状況を踏まえて編集されているので、レトリックだけは強いが、まだ危機感が薄いと感じました。一時1万5000円割れた株価水準などを考えれば、世界恐慌に匹敵する事態が起こってもおかしくない。金融システム維持のための公的資金投入が必要になっていっている。住専問題の時の国民の反対を考慮すれば、政治家は手が打てない。これが危機の本質ではないのか。今の危機をどう管理するかという短期的課題と、長期的に規制緩和・行革を進め、財政再建の足場を固める必要もある。繁華の夢は終わって歴史的に大きな衰退期に入り始めている。

山下 国民全体が危機感を

山下悦子さん 小暮史章さんの「世界同時株安」で日本が敗れた「情報戦」(フォーサイトNo11)が10年前のブラクマンデーとの違いを指摘し、「インターネット」という電脳空間で起きた初の株式相場の波乱である」としています。ピーター・タスカさんは「下降線」をたどり続けるほかない日本」(同)で、「日本人は危機感を持つことが必要」と指摘していますが、日本は個人の投資家が割前前後と少ないのでまだ危機感がないのかも知れない。国際競争を生み出すための改革や政治のあり方が後手に回っているとしたら、政治家や官僚だけでなく国民全体が危機感を持つべきでしょう。「未曾有の大恐慌がやってきた」は分かりやすかった。既に「平成恐慌」に突入しているという認識で、「世界恐慌下



(左から) 中西輝政さん、山下悦子さん、橋爪大三郎さん—毎日新聞東京本社で

う厳しい取捨選択だと思ふ。「現代」の論文が言う「無能な銀行員」に平均以上の給与を払っている国際競争力のない無能な体質を削り、生き残る銀行も大幅な整理をしなければならぬ。そのうえで、起業家が生まれ、新しい産業分野を作るのに役に立つ長期的施策を打ち出すべきです。

山下さん 熊谷勝行さんは、黒田蔵郎さんとの対談「緩やかな回復」の嘘八百」(ボイス)で、経済実態の観点から「景気回復」といつづけた政府のミスリードの責任は重い」と明確に指摘しています。政府は景気や産業活動の実感的な状態を理解せず現象と遊離している批判し「不良債権問題を一気に整理する」しかないとしていますが、今となってはすべて後手に回ってしまったという感じがします。

中西さん 大量の公的資金投入の決断なしで不良債権問題を解決しようとする

自由帳

サッカーという快樂

来月6月にフランスで開催される今世紀最後のW杯をめぐってのイランVS日本のサッカー戦は視聴率47.0%にデオ・リサーチ関東地区、瞬間最高では、延長戦に入る直前に57.7%を記録した。わが家でもスポーツ好きの子供達の歓声が深夜まで響いていた。熱狂的なサポーターの存在で有名な浦和レッズの本拠地に住んでいるのだが、フランス行きはゴールを決めた「野人岡野」が浦和レッズの選手という点もあって、子供達のフイバーぶりは頂点に達した。マレーシアのラウンドを埋めつくした日本のサポーター達の姿がわが家の子供達の姿と重なり、「この現象は一体なんだ」と考えた。

「論座」11月号が「論考から」の顔ぶれは、中心選に、今回大活躍だった中田英寿選手のような「日の丸のた

20世紀最後のW杯のために、というタイトルで4本のエッセイを掲載している。今福龍太氏によれば、国家原理に従属してきた近代サッカーは、今やナショナル・チームとは限らない現象が起きている。

広瀬一郎氏の「サッカーと旅の楽しさ」は、サッカー愛好家中一雄氏の「日本のサポーターも、サッカーを自分で楽しんでいる。」「サッカー好きは旅行好きであり、サッカーの楽しさは旅の楽しさ」は、サッカーを愛する人々の共通の楽しみである。サッカーは、日本だけでなく、世界中に愛されている。サッカーは、旅の楽しさである。サッカーは、旅の楽しさである。サッカーは、旅の楽しさである。

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて1月号)

橋爪大三郎	山下悦子	中西輝政	編集部
<p>①アジア成長神話は終わっていない(渡辺利夫) =中央公論 高い貯蓄率と域内の発展連鎖。通貨の混乱は一時期で、成長は周辺に波及しつつなお続く</p> <p>②空前の社会現象「ポケモン」超ヒットの謎(大和道和) =現代 すぐ手に入り、だれもが対等に遊べる。750万本を越すゲームボーイの超ヒット・ソフト</p>	<p>①総特集「98危機のマーケット全予測(須田慎一郎、松岡亮ほか) =エコノミスト12/23 金融危機の時代を生き延びるための必読エッセーや情報が満載!</p> <p>②父親の真実—金属バット殺人事件(吉岡忍) =文藝春秋 昨年起きた東大卒の父親による子殺しの真相究明。病める現在の家族の問題を浮き彫りに</p>	<p>①文明論としての地球温暖化(米本昌平) =中央公論 京都会議の成果をどう考えるか。米国など先進国の生活様式を「文明問題」として切り込む</p> <p>②市民的自由なき民主主義の台頭(F・ザカリア) =中央公論 冷戦後の民主主義に潜む「市民的感覚」の隠された不寛容を取り上げる</p>	<p>①対談 私たちに「つぶやき」が聞こえるか(芹沢俊介、西山明) =世界 援助交際など子供をめぐる問題の根源に、親の視線、夫婦関係など大人の側の問題を探る</p> <p>②さかきばら少年の精神医学(福島章) =犯罪と非行11月号 非行臨床の専門家の視点から神戸小学生殺人事件を考察。安易な一般化の論調を批判する</p>

雑誌を読む

12月

日本の「主体」

- ◆日本 第二の敗戦(江藤淳) =文藝春秋  
今の行革は外国人のための、横から来ている行革だ
- ◆柔らかな総合安全保障論の試み(寺島実郎) =中央公論  
安全保障基盤の充実へ「新しい公共」意識の構築を
- ◆だれが日本の方向性を決めているのか?(N・クリストフ) =中央公論  
戦後日本の主要な力学は政治や指導者ではなかった
- ◆対談 戦後以後「ねじれ」をどうする(安岡章太郎、加藤典洋) =群像  
「ねじれ」のほうが普遍性をもつあり方だ(加藤)
- ◆徹底研究「国家の謝り方」(伊藤精介、クライン孝子、黄文雄、岸田秀ほか) =サピオ12/24  
「仲間うち意識」の謝罪外交は通用しない(岸田)
- ◆ネオ・ジャパノロジスト25人の対日観(古森義久) =諸君!  
米国の若手日本研究者をレポートする。連載第1回

中西輝政さん 経済特化への反省

中西輝政さん 日本論、国家論の視点から論じたものが目立ちました。いろいろな意味で大きな曲がり角だった戦後50年の1995年以降、日本が直面している問題の深さがだんだん意識され、国家論をクリアしなければ答えが出ないと自覚され始めたのだと思えます。江藤淳さんの「第二の敗戦」(文藝春秋)は冷戦後、特に90年代半ば以降の日本が、経済の面でも安保の面でも社会的な価値観の面でも起こしている「崩壊現象」を「第二の敗戦」と



中西輝政さん

橋爪大三郎さん 「公共」をどう再組織



橋爪大三郎さん



山下悦子さん

と、安岡さんのやや楽観的な視線との間にコントラストを感じました。安岡さんは戦前と戦後の二つの世界を生きたから、戦後の日本に限定したナリミットしかしていない。それに対して、加藤さんが無力感、危機感を強く感じるのは、一つの世界しか知らない人間がその世界の崩壊を感じた時に覚えるおののきだろと思う。戦後日本の大きな分岐点は、二つの世界を知ることから、そうでない人へ世代が完全に交代しつつあることです。

山下悦子さん 価値観混乱はまだ続く

は、そんな個人はあまりに空虚で、価値の軸を自分の中に発見できないという崩壊だった。歴史にせよ倫理にせよ、個人が互いに助け合う「公共」をどう再組織するかという課題を、今、日本は突きつけられたのではない。山下さん 古い価値観から利益を得ている上の世代の人々はまだまだそこに居るし、利益を温存して守ろうとする官僚などもいる。一方、若い世代にとっては会社も結婚ももう「永年就職」ではあり得ない。自立せざるを得ないところで人生設計を考えている。新旧の価値観が交錯する混乱は当分続かないでいいだろうか。

自由帳

今、キボンの『ローマ帝国衰亡史』を改めて読み返している。三十年前に初めて通読したあと、ヨーロッパ留学中に何度も繰り返し読んだ。それは、西欧を考へるとき、「ローマ」という欠かせぬ視点を与えてくれたが、それ以上に単純に歴史を眺め楽しむを教えた本、とつねづね感じてきたものである。今年二月

「衰亡史」への関心

に、たまたま私自身が「大英帝国衰亡史」と題する本を出したところ、幸い大きな反響を得たのだが、その関係で私のところを各方面から、大英帝国の衰退をローマ帝国と比喩するものが多い。その点についてはここで詳しくは論じられないが、すでに「退」の二文字が徐々に真に迫って浮かび上がるようにも感じられる。しかし過去高度成長の真の最中においても、あながち明治・大正期の、それこそ坂の上の雲をめぐる日本全体がまっしぐらに進みつつあったときも、上掲のキボンを始めとする東西の様々な衰亡史に日本人読者の関心は向かいつづけたのである。そう言えば、西欧において、もまたかつての中国においても、むしろ国の勢いがより

があれは」とはわれわれにどうして何かも、考えさせられます。山下さん 「恋愛や純愛はグサイ」という形で、女も男もつみなすり切れてしまっている。少女を扱う側のロジックもあるわけだから、援助交際する少女たちだけが問われているのは一方的な感じがしなくもない。中西さん 結局、共同体が崩壊するわけだ。共同体の問題として考えるのか、ただ社会のトレンドとして分析するのか、そこに論としての性質の決定的な違いがある。橋爪さん 田久保忠衛さんは「日本『保護国』化の陰謀」(正論)で、共同体の崩壊、価値観の崩壊が日本人の「主体」を解体してしまっている、米国の強烈な不信を生んでいることを、例を挙げて指摘しています。諸外国の不信が日本を追い詰めている一つの要因であることは、確認されている。中西さん 安部論者として日本社会の価値観や精神状況論に収められていかに感を得ない。田久保さんと寺島さんの安保政策論は随分違っていますが、そこが問題の根源だということ論は共通している。経済成長路線が回復不可能な破たんをみているのは、江藤さんがいっている、いい現象と考えるべきです。経済にしか特化できなかった戦後日本の自己実現の流れを、過去のものとして振り切る精神的な活力を日本人が失っているかどうかが問題です。橋爪さん 全体としてはひどい状況ですが、一歩先に突破の糸口を見いだした個人にとっては活躍の時代が待っている。キーワードは加藤さんも論じている「公共性」だと思ふ。日本の戦後は、個人の欲望、自由が大切なという経済の論理を軸に発展してきた。ところが、結果として気がついてい







# 医療不信を克服できるか

## 臓器移植法

- ◆最後に問われる医師の倫理(和田秀樹) —This is 読売  
移植医の功名心で「難しい」移植が行われる懸念も
- ◆政・官・医の怠慢が「大量移植難民」を生む(吉原清児) —現代  
「二つの死」を存在させる法律は政治家の妥協の産物
- ◆「脳死移植」かくも長き不在(宮田親平) —諸君/7月号  
反発は科学技術受容史にかかわる文化的拒絶現象だ
- ◆対談「移植OK」で始まる臓器争奪地獄(近藤誠、中島みち) —文藝春秋7月号  
法律で「脳死は人の死」とするのは医師を守るため
- ◆「脳死」は人の死に非ず(遠山高史) —選挙6、7月号  
「例外的死」を設けると、素朴な死の認識が失われる

橋爪さん 国会での足かけ4年  
にわたる審議を経て、臓器移植法  
が成立しました。問題を掘り下げ  
ていて、最も説得力があったのは  
「諸君」7月号の宮田親平さん  
の「脳死移植」かくも長き不在  
でした。脳死が人の死かどうか議  
論されてきましたが、臓器を必要  
とする人の臓器を提供したいとい  
う人がいるのなら、なんとかして  
臓器移植ができるようにすべきだ  
という合意があったと思います。  
それをどういう形にするのが臓  
論になったわけですか。脳死は人の  
死ではないのだけれども、臓器移  
植の場合に限って移植を認めるの  
か、それとも、脳死は人の死なの  
だから、臓器を取り出していいの  
か。宮田さんによると

中西さん 私も宮田さん  
の論文はよく書いています。  
思いますが、文中で、脳死を  
死と認めないのは「文化に  
よる拒否」だと繰り返して主  
張しています。その通りだ  
と思う。私自身も正直言っ  
てシレンマに陥りました。  
日本人の患者が外国へ行って移植  
手術を受けるという現状を考えれ  
ば、脳死を死と正式に認めること  
が当然のように思えます。しかし、  
文化的なものが中核にあるなら、  
安易に扱ってはならないとも思  
います。宮崎哲弥さんの「人間は脳  
のみによって生きるのか」(論争  
7月号)も、精神科医の遠山高史  
さんの「脳死」は人の死に非ず」  
(選挙6、7月号)も、脳死を人  
の死と認める不適切さを論じてい  
ます。近藤誠さんと中島みちさん  
の対談「移植OK」で始まる臓  
器争奪地獄」(文藝春秋7月号)  
は問題を列挙しています。どの論  
文にも共通して書かれています  
が、医師に対する不信が日本の場  
合は深刻です。我々がまず、手  
つけなければならない問題は、こ  
の問題ではないのでしょうか。医師  
の功名心で移植手術がされる恐  
れがある、とはいつの指摘されて

いる。移植推進論者はこのことを  
避けて通れないでしょう。  
山下さん 文藝春秋の対談と  
もに、和田秀樹さんの「最後に問  
われる医師の倫理」(This  
is 読売)が医療不信を取り上  
げていて印象に残りました。近藤  
さんも和田さんも、医師が臓器移  
植の必要がない患者に移植手術を  
する恐れを指摘している。医師に  
倫理がないと、さまざまな問題を  
起こしてしまふそうですね。この  
法案自体が、患者ではなく医師を  
守るためのものと近藤さんは言  
い切っています。インフォームド  
・コンセント(十分な説明)に基づ  
く合意を保障するため、患者の  
権利法が必要だという声もありま  
す。低温療法で回復した例  
もあるのに、医師がドナー  
になる人をきちんと治療す  
るのか心配になりますね。  
臓器移植というのは、どこ  
かすっきりしない。吉原清  
児さんが「政・官・医の怠  
慢が「大量移植難民」を生  
む」(現代)で、ドナーと  
レシピエントの自己決定  
権、「心」を社会全体でど  
こまで尊重し合えるのか  
大切なことだと言っています。た  
だ他人の脳死を引き換えに

しか命が助からないとい  
うのもつらい気がします。自  
分の子供が臓器をもらえ  
ば、助かるという立場になれ  
ば、私も他人の脳死を望む  
感情に陥るかもしれません  
が。

橋爪さん 臓器移植が医  
学的にも、倫理・道徳的にも理想  
的な治療法ではないというの  
はその通りです。もし人工臓器があ  
れば、わざわざ脳死者から臓器を  
取り出さなくてもいいわけです。  
でも、現に臓器移植希望者がいる  
限り、この問題は避けて通れず、  
ルールが必要なんです。その意味で、  
政治的妥協の産物という側面はあ  
る。でも、まがりなりにもルールが  
できたというのはいいことだ、と  
私は率直に思います。ただ、法律  
に問題が二つあります。一つは少  
年への移植手術が困難なという点  
です。大人の臓器は大さきなどか  
ら子供に移植するのが難しいの  
で、6歳以下は脳死の判定をしな  
いし、文書による合意なので15歳  
以下もドナーにならない。もう一  
つは、今回の厳しい枠組みで、こ  
れまでは問題なく実行できてきた  
移植についてもストップがかかる  
ケースが出てくるでしょう。

中西さん 朝鮮民主主義人民共  
和国(北朝鮮)の飢餓問題は、と  
てもわかりにくい問題ですね。食  
糧支援をするのが妥当か、とい  
う疑問に直面していますが、大きな  
流れとしては、四者協議に北朝鮮  
が協調するかどうか、さらに  
金正日体制が本気で安定してい  
るのか、日本の安全保障体制にも  
影響している問題です。よく書け  
ている印象的だったのは佐藤勝  
巳さんの論文「金正日は後継者で  
はない」(正論)でした。暗み込  
んだ議論をしながら、大きくはず  
れてはいないと思う。特に、中国  
が北朝鮮に対して非常に大きな影  
響力を持っているという指摘は正  
しい。中韓国交正常化によって中  
国が影響力を持った、この見方を  
した日本の論者が多かったのだ  
が、佐藤さんは、現在の北  
朝鮮はまったく正当性を持  
たない軍事独裁政権である  
と指摘しています。西岡力  
さんの「北朝鮮飢餓宣言」  
に乗せられるな(諸君)に  
は北朝鮮の対日戦略を細か  
く分析して、食糧援助をす  
る必要はないと論じていま  
す。対照的なのは小此木政  
夫さんの「迫られる北朝鮮

# 単純には行かぬ食糧支援

## 北朝鮮の飢餓

- ◆金正日は後継者ではない(佐藤勝巳) —正論  
中国の「国益」に反する金正日のトップ就任はない
- ◆迫られる北朝鮮危機への対応(小此木政夫) —世界  
北朝鮮に改革开放を選択させ「連鎖崩壊」の回避を
- ◆北朝鮮「飢餓宣言」に乗せられるな(西岡力) —諸君!  
「人道援助」の美名の下に軍用米を確保するのが目的
- ◆日本に数十万人の「飢餓難民」が雪崩込む日(辺真一) —宝石  
目撃証言を元に「人肉食い」などの惨状をレポート
- ◆特集 北朝鮮の残酷な夏(落合信彦、恵谷治ほか) —サピオ8/27-9/3  
配給崩壊で援助食糧が人々に届く保証はない(落合)

危機への対応(世界)で  
すね。危機を避けるために  
食糧支援が必要だとしてい  
る。でも、果たして食糧を  
送っても、本当に飢えた人  
々のためになるのかどう  
か。さらに、今回の飢餓は  
農業政策の基本的な失敗に  
よるもので、食糧支援は  
北朝鮮の失敗を恒常的に  
しりぬぐうことにな  
ってしまうという問題があ  
る。「人道」だけでこの問題を考  
える段階は過ぎたでしょう。

橋爪さん 今どこまで飢えの  
実態が進んでいるかについては辺  
真一さんの「日本に数十万人の「飢  
餓難民」が雪崩込む日」(宝石)  
が詳しい。中国との国境の町(新  
義州)に難民が集まってきている  
というの。昨年、私が現地を旅  
した経験から言っても信憑性が  
あります。普通なら、社会が崩壊  
するのですが、軍が飢えている  
ので秩序が維持されている。もし  
軍が一步でも引いたら、軍も国家  
も解体してしまうという危機感が  
徹底して、その頂点に金正日  
がいるのだと思うのです。こ  
の政権は飢餓の解消に取り組み  
ず、巨大記念碑を作るとか、無  
駄なことはばかりしている。食糧援

助は金正日政権の思うつぼです。  
中国はかなりの規模の経済援助を  
していますが、それは人道的とい  
うより、国益にかなうという冷静  
な判断に従ってやっていること  
ですね。

山下さん 秦辰也さんの「北朝  
鮮食糧危機・NGOだからこそ  
できること」(世界)で、食糧支援  
にあたるボランティア団体が日本  
で育ってきているのを知りまし  
た。世界食糧計画が、約20万に  
ついでに救済物資を人々に確実に  
届けることを保証していること  
も、興味深く読みました。隣の  
国で子供やお年寄りが飢えて死  
んでいるのを知れば、それを可  
哀さう、できることなら助けて  
あげたいと思うのは人として当然  
の感情です。国益にしばられ  
るをえない政府とは違う立  
場から、自分たち出来る  
ことをしてあげようというの  
は、市民として当然の対応  
だと思いますよ。

中西さん ただ、食糧が  
確実に彼らに届くのかどう  
かが問題なんです。NGO  
の動きに、だれも反対しな  
いと思う。ただし、送った  
食糧が軍にいつてしまふの  
なら、意味がない。国会で

池田外相は、北朝鮮の政府  
機関がかかわった拉致事件  
があって、日本政府はそれ  
を認識している、とほろほ  
り言った。である以上、拉  
致事件解決の筋道をつけな  
いと、政府は食糧援助を一  
切できない。北朝鮮はそれ  
を認識すべきで、それが国  
際関係の常識です。北朝鮮  
以外にも人道支援を必要と  
する国はイラクやウガンダなど  
いっぱいある。北朝鮮がもつ少  
しな対応を示すように努力す  
ることが国際貢献であり、日本の  
利益ではないか。

橋爪さん 北朝鮮の政権が新し  
い政策に移行することが、飢えを  
解決する最良の方法です。ただ、  
戦争の危険が裏腹にひかえて  
いる。まかり間違っても金正日政権が  
強化されて戦争準備でもされるの  
なら、食糧援助には慎重になら  
ざるを得ない。

中西さん アメリカと中国がそ  
れぞれ、自国の国益のために北朝  
鮮の実態を知りながら、甘やか  
してきた。世界戦略の中でもあ  
る。世界戦略の中で、日本はも  
っと広い視野で考えられる立場に  
いるはずですよ。





# 予防・治療に求められる

## 「自己責任」

### がんと生きる

- ◆ガン病棟日録(江國滋) —新潮45 11月号  
8月に亡くなった筆者の壮絶な闘病記。連載第2回
- ◆対談 ガンからの復活(梅原猛、瀬戸内寂聴) —中央公論  
2度目のガン体験で、人生の冬を痛感した(梅原)
- ◆対談 「がんの時代」を生きる(五木寛之、竹中文良) —潮  
がんを考えることは、社会の問題に通じる(五木)
- ◆「近藤誠理論」を検証する(深見輝明) —潮  
「がんと闘うな」をめぐる論争の整理、検証を試みる
- ◆延命できればいいではないですか —サンデー毎日11/23  
抗がん剤の延命効果のデータ評価をめぐる議論に

山下さん 母も義姉もがんで亡くなったので、切実なテーマです。告知するかどうか、どのようにつなぐのか、医者との付き合い方など、さまざまな問題があると思えます。もっとも印象的な文章は連載中の江國滋氏の「ガン病棟日録」(新潮45)でした。俳句を交えたリアルな闘病記で、がんというのは甘んじない病気なんだと改めて実感させられました。がんは検査や治療が患者にとってとても厳しくつらい病気ですね。では、どう治療を選ぶのか、これは自身の死生観に照らして合わせて、自分で選ぶしかない。梅原猛氏と瀬戸内寂聴氏の対談「ガンからの復活」(中央公論)も五木寛之氏と竹中文良氏の対談「「がんの時代」を生きる」などを収録した「潮」の特別企画「がんとの対話」も読みごたえがありました。がんは痛みがひどくて、身内が見ていられないほど苦しみますが、五木氏が「痛み」を克服することが、末期だけなら、医療のいちばんの目的「延命」につながるのではと共感してました。

橋爪さん がんの語りが変わってきたのを感じます。しばらく前までは、がんという不治の病で、かかるのはラッキーなようなものだと考えられていた。でも最近では発生のメカニズムがかなり分かってきて、抗がん剤や放射線治療、切除手術などで、中期ならなんとか克服できるケースが増えてきた。橋本光弘氏の「がん予防のための日常生活の工夫」(潮)は、がんもストレスや食習慣、喫煙などが引き起す「生活習慣病」的なところがあり、その人のライフスタイルとがんの発生がかなり結びついていることを論じています。がんはクジ引きでどう自分の責任でかかるとも考えられるし、かかった後も、自分の覚悟で治療を選ぶ必要がある。自分の生き方の問題として、がんを考える状況ができてきた、と思います。

中西さん 瀬戸内氏との対談で梅原氏が終始、がんになったことで、これまでなかった社会のしがらみや考えがなくなったことが、

「社会的義務は果たしたから、これからは本当に書きたいものだけ書こう」と思うようになったとおっしゃっている。自分は、何をしなければいけないかを考えさせる力が、この病気にはあるんです。それと今の日本で健康ブームが異常に大きい。これはどこから来るかというと、今世紀初頭のイギリスでもそうなんですが、繁栄した社会が少し衰退し始めるのと異常な健康ブームが起るのですね。当時のイギリスの新聞を見ると、薬の広告でいっぱい。温泉ブームも古代ローマと共通して見えます。これは文明史の観点から考えても興味深い。時代の行き詰まり、という感覚がまた生じていると、個人レベルの本音の関心が露出する現象として普遍性がある。各雑誌を見ても全体として、がんについて非常に細かい各論がいろいろある。ところが、デジタルに目を向けると、いかにがんを克服する可能性など、遠い未来を見すえた前向きな総合的な論考が見られなかったですね。

橋爪さん 近藤誠氏の主張をめぐって「サンデー毎日」と「週刊文春」とがやり合っていますが、現代のがん治療がかなりの部分で無駄だというのが近藤さんの持論です。早期発見も無駄、手術も無駄、抗がん剤は効かない。この思い切った主張を「潮」で深見輝明氏が検証していますが、近藤氏が火を付けて下さったのは、とてもいいことで、ますます、患者が自分の責任で治療法を選ぶなければならぬ現状が見えてきました。

山下さん 近藤氏の発言には妥当な部分も含まれている部分があるように思いますが、不幸にしてがんになった場合には「治療」を信じて前向きに治療を受ける姿勢を患者が持たないようでは、やりきれません。現在の健康ブームですが、病気になるまで社でリストラされるとかつまずいたが資本で、健康に対する自己管理が強く求められている時代状況があると思います。そういうことも考えると、健康ブームの背景には深刻な事情もあるように思えてならないのですが。

# リーダー誕生のドラマ

## W杯出場決定

- ◆強くもなく弱くもない日本サッカー(石川好) —正論  
根拠不確定なサッカー界は日本の急製造近代に似て
- ◆韓国の留学生が見たW杯韓日決戦(権容爽) —論座  
出場決定は「大和魂」でなく中田のクールな判断力
- ◆「サッカー日本代表が我が人生」の人々 —スパ12/17  
会社を辞めた、転職した……サポーターたちの肖像
- ◆二十歳のリーダー「中田英寿」誕生の夜(金子達仁) —文藝春秋  
「カズ交代」に象徴されたイラン戦のドラマを再現
- ◆人物交差点・岡田武史 —中央公論  
「最も気の毒な部下」と呼ばれた監督の人心掌握術

山下さん サッカーの日本代表が史上初めてワールドカップに出場することが決まりました。論文では、金子達仁氏の「二十歳のリーダー」中田英寿誕生の夜」(文藝春秋)や「カズと中田 主役交代の時」(アエラ12/1)のように、三浦知良選手から中田選手へと代表チームの中心が移ったことを論じたものに目をつかれました。特に、中田選手の独特なキャラクター。マスコミから生息気だと言われることもあるようですが、従来の体育会系のイメージとは随分違った選手です。国家のために戦うのではなく、自分のために戦うのだと言ってはならない。そういう世界性でも呼べる傾向は、野球の野茂英雄投手とも通じるのではないのでしょうか。中田選手はイタリヤでのプレーを希望しているようですが、もう一つ印象的だったのは「岡田監督 孤狼な戦争」(週刊文春12/1)に代表される岡田監督論ですね。イランとの第3代表決定戦で、もうだれが見ても、早く選手交代しろ」と思っている「オールドファン」も少なくない。

大物選手を降ろして、城選手と呂比須選手を入れた。この選手起用が高く評価されています。マスコミは、権威とか昔の実績に頼らない選手起用に、政治なども含めて、日本の現在の暗い雰囲気吹き飛ばす道を求めているように感じます。もう一つ、目を転じると、バスケットボールが男女とも、世界選手権に出場することが決まりました。また、女子サッカーも世界選手権に出場します。若い世代の男女がいろいろなスポーツで世界を舞台に活躍できる水準まできているという点も、このように、サッカーのフィーバーを相対化する意味で、これらにも注目してほしいですね。

橋爪さん 読んで一番奇妙に思ったのは「サッカー日本代表が我が人生」の人々」(スパ12/17)です。いい大人が大枚はたいて外国まで応援に行ったり、会場の周辺にテントを張って、何日も前から試合を待つ。中には会社を辞める人もいます。そして全身全霊を上げて応援する。動機を聞くと、感動するとか、サポーターの頑張りで試合を左右できるとか言うわけです。私は、ここに大変な虚無を感じます。つまり、サッカー以外のことにほとんど関心が持てないわけですね。サッカーは本来、数ある事柄の一つに過ぎないのに、それをほめるか超えて、人々の心の空白に入り込み、満たしている。

中西さん 私が一番印象的だったのは「人物交差点・岡田武史」(中央公論)でした。我々日本人は、岡田監督という一人のリーダーが育つていくところを現在進行形で見たわけですね。急場しのぎのような形で起用され、孤独をかみしめながら、仕事をやり遂げた。そして、このような形で国のリーダーになって生まれるんじゃないか、企業だって、大学だって、と考えると、これらにも注目してほしいですね。一方、石川好氏の「強くもなく弱くもない日本サッカー」(正論)は石川氏らしい謙遜論がきいた論文です。日本チームはどこに核があるのか、果たして強いのか弱いのかわからない。これは、日本という国そのものの姿でもあるのではないかと指摘しています。応援しては、私は30年前に見た英国のサポーターたちの興奮した姿を思い出します。若い層の自己決定能力、自己管理能力に期待したいですね。

中西さん ヨーロッパでは街が火の海になったり、民家が略奪されたりしている。

橋爪さん 2002年のW杯日韓共同開催を控えて、このあたりの問題も考えていきたいですね。

中西さん でも、高層サポーターなんていうものなし、上からの管理というのはこれからの日本を考えるとどうかわからない。サポーターの中から自発的に声を組織化する動きが出てほしいと思います。若い層の自己決定能力、自己管理能力に期待したいですね。